

## 第 55 回 閑話休題～鹿島大明神！

I T 生

茨城の鹿島神宮は創祀が神武天皇元年だそうである。

霞ヶ浦をはさんで反対側（対角線上の）にある筑波山神社も同じ年にできたらしい。

真偽はともかく、筑波山上では古代祭祀が行われた痕跡が確認されており、日本人の山岳信仰の名残だという。古くから信仰の対象になっていたのは間違いない。筑波山と同じぐらいの高さの兵庫の六甲山の山上にも古代祭祀の痕跡がいくつか確認されている。筑波山も六甲山も高さが約800メートルで、わりと危険を伴わず、日常的に登りやすい高さなのだろう。両山とも、地殻変動によって隆起した岩の塊である。

さて、鹿島神宮には、要石と呼ばれる場所がある。江戸時代の鯀絵には鹿島大明神とともによく登場する。要石は、伝承によると、地震（鯀が暴れるのを）をおさえるために、神が石の棒を地中に差し込み、鯀の頭を押さえたことになっている。この鹿島神宮の要石を、水戸黄門様は、掘ろうとしたらしい。ところが7日7晩かけて大騒ぎしても、底がみえず、あきらめた、ということになっている。



暴れる鯀（地震）を抑える要石伝説がのこる茨城県の鹿島神宮

恐らく、推測するに、この要石は、筑波山と同じく、地殻変動で巨大な岩盤が地中から顔をだした、その先端なのだろう。となると、地震をおさえるどころでなく、ここでは大きな地震がおきたという証拠なのではないかと思われる。ひょっとして、鯰の頭なのではないか。

少なくとも、平成23年の東日本大震災では、神宮をはじめ、茨城の沿岸部も大きな被害を受けているから、古代からたびたび同じような地震に見舞われていたのだろう。だからこそ、要石伝説ができたのだろうか。信じる者は救われるとみるべきか、歴史の警鐘とみるべきか、難しいところである。

(令和2年2月)